

「御南地域も戦場になった！備中高松城の水攻め」

岡山市教育委員会文化財課

高橋伸二

1. はじめに

備中兵乱とは？

2. 天正初年以降の備前・備中の情勢

- ① 毛利包囲網と宇喜多・浦上・三村の動き
- ② 備中兵乱により三村氏滅亡 [天正2(1574)年11月～天正3年5月]
- ③ 毛利氏の本願寺支援 織田対毛利
木津川口の戦い [天正4(1576)年7月] [天正6(1578)年11月]

3. 中国兵乱

- ① 播磨上月城の攻防 [第一次 天正5(1577)年12月] 羽柴勢攻略
[第二次 天正6(1578)年4月～7月] 毛利勢攻略
- ② 宇喜多直家毛利から離反 [天正7年(1579)]
今保川の戦い 辛川合戦 [天正8年(1580)2～3月]
- ③ 毛利氏の防衛ライン整備 (境目七城ほか) [天正7年(1579)10月～]
宮路山城・冠山城・高松城・加茂城・日幡城・庭瀬城・松島城
- ④ 八浜合戦で宇喜多勢敗北 [天正10(1582)年2月21日]
- ⑤ 羽柴秀吉の姫路出陣 [天正10(1582)年3月15日? 4月2日?]

4. 備中高松城の水攻め

- ① 今保で合戦 [天正10(1582)年4月13日] 庭瀬城・岩山城の動き
- ② 秀吉の備中進出 [4月16日～]
秀吉は備後衆や備中勢が守る城を攻撃。大半が調略により無力化される。
冠山城[4/25落城] 宮路山城[5/2乃美景興退去] 日幡城[上原元将内通]
加茂城[5/2生石治家内通] 岩山城でも在番の備後衆退去
- ③ 高松城包囲
攻撃開始[4月27日] 築堤作業[5月8日～5月20日]
小早川隆景・吉川元春ら本隊は築堤の完成後に着陣[5月21日]
- ④ 高松開城と中国大返し
6/2 本能寺の変 6/3 講和成立 6/4 清水宗治ら自刃
6/6 両軍撤収開始 6/7 秀吉姫路到着 6/9 姫路城出陣
6/13 山崎の戦い

5. 戦後処理について

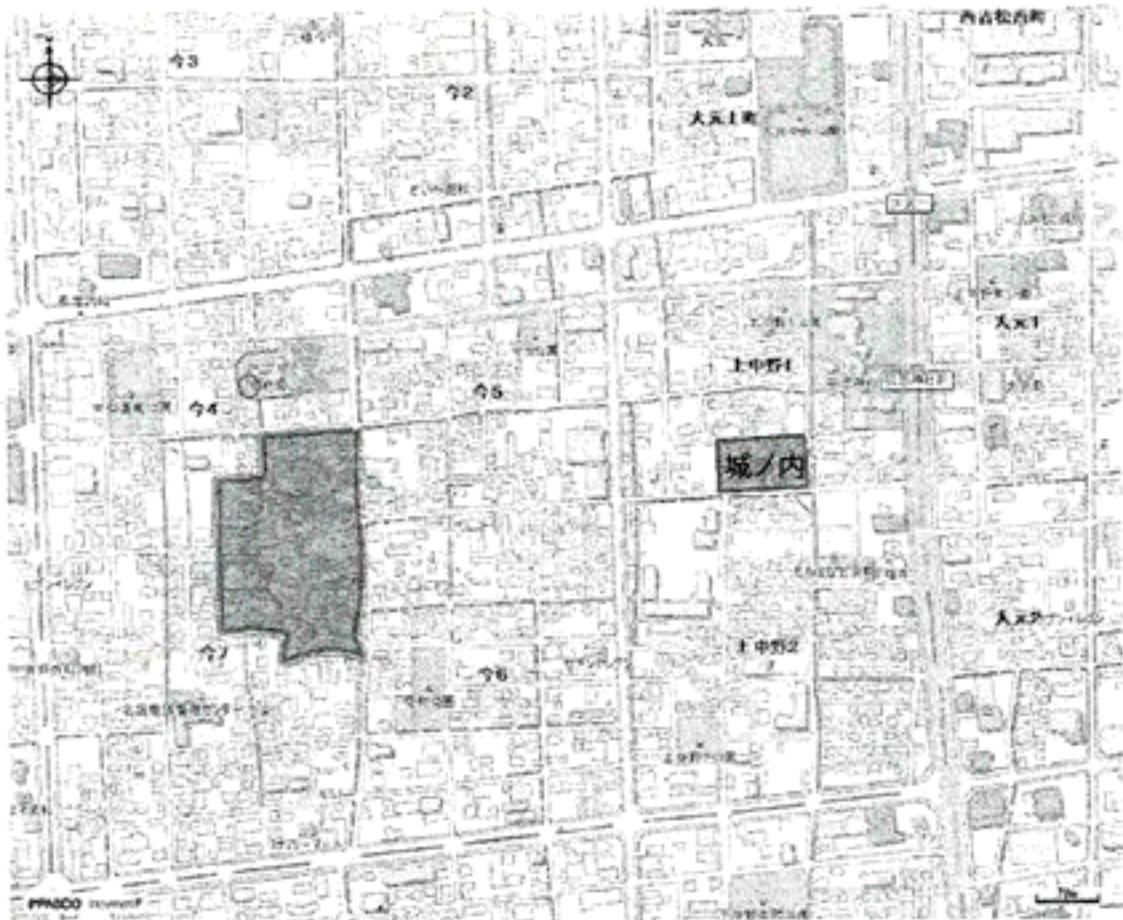


図1 上野古城
想定地

居館の存在が想定されているものの、市街地化が進み痕跡が確認できない。埋蔵文化財は確認されていないが、周辺では平安時代から中世頃の遺物の出土も伝えられている。

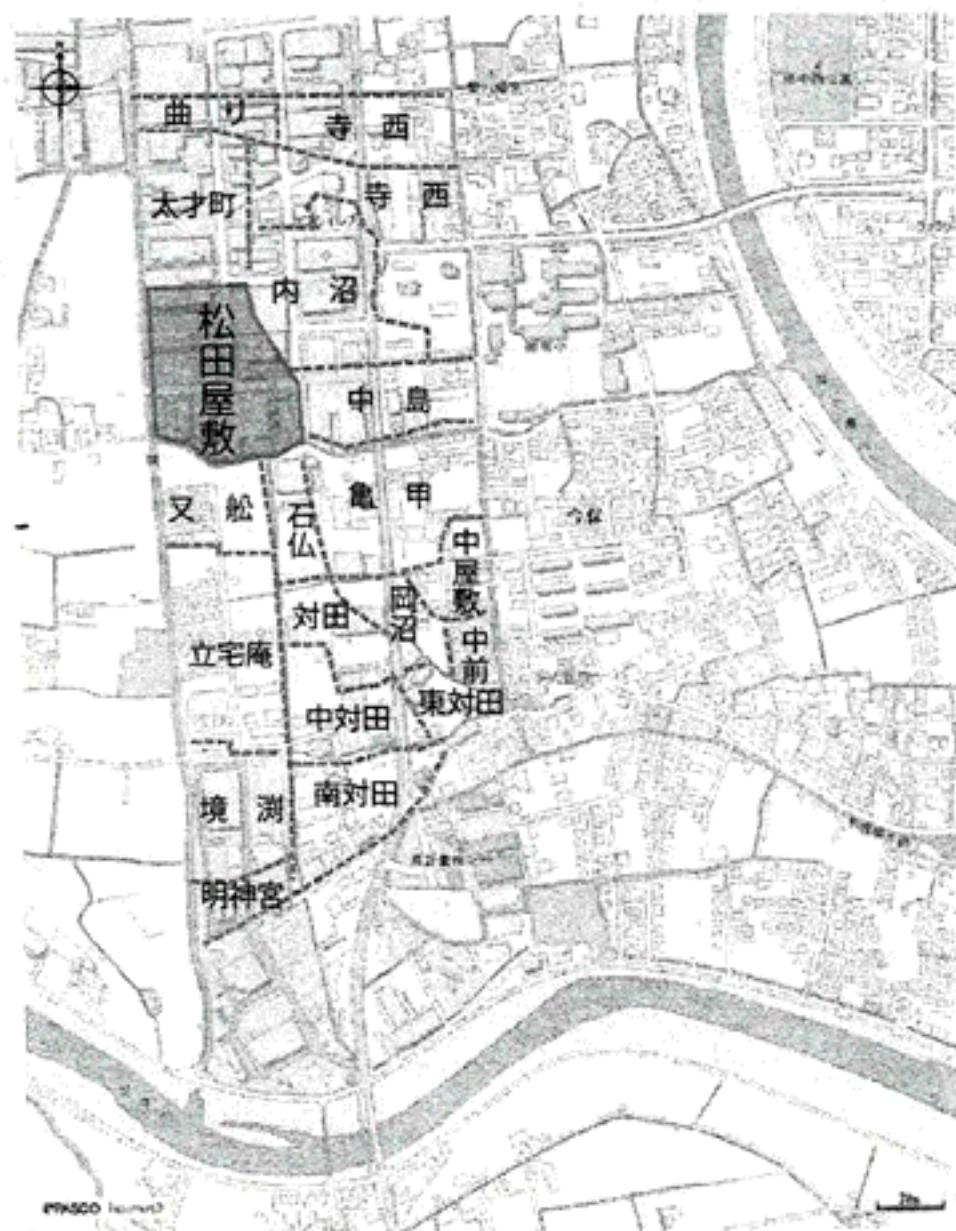


図2 松田屋敷とその周辺

金川城を本拠とする松田氏が備前南部から備中地域をうかがう拠点として室町時代頃に設けた可能性があるが現在は工場に埋もれ、実態はまったく不明。

周辺には寺院の存在が想定される地名もみられる。

関連地図

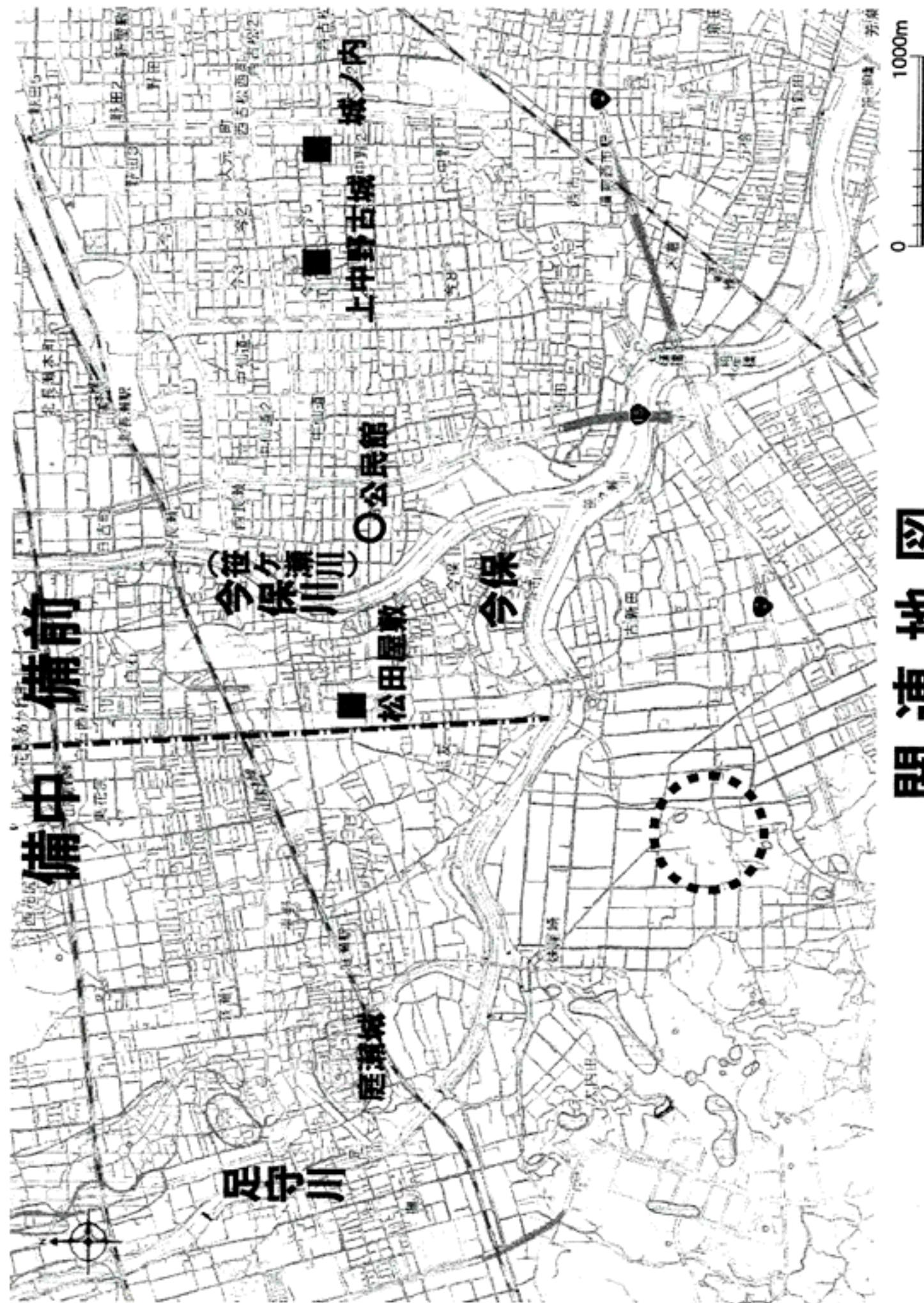


図3 御南地域の城館関連図



図4 庭瀬城



図5 松島城



図6 日幡城



図7 加茂城



図8 宮路山城

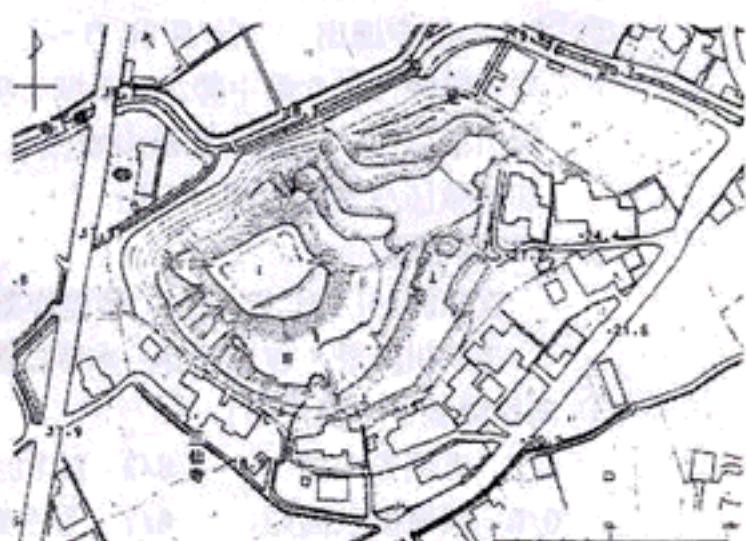


図9 冠山城



備中高松城は天正初年（1573）頃、三村氏家臣の石川久式によって築城されたとする説があり、天正2～3年の備中兵乱で三村氏とともに石川氏も滅んだため、清水宗治が城主となつたとみられる。

図 10 備中高松城

去廿二日於今保妻、抽粉骨分捕、高名忠節無比類、必恩
賞可相計者也、仍狀如件、

卯月廿五日

浅沼又兵衛殿

直家（花押）

三重 萩藩閥閱錄 卷百四ノ二 湯浅廉
兵衛

尚々、夜前當表へ忍籠越候、折節待付一段之者、一人貝
原手江持捕候、太慶・存候。

應令啓候、吾^(事)事、來鶴就祝言之儀被差下、波是測之儀申
付候とて令逗留、去五日上着候、從在所茂可得御意候處、
取亂無音心外候、仍先月十三日日幡・鴨・松鶴被相懼、俄
辛川口被相動、不調儀付被而失行候、然者當城衆旁御家來
衆と今保妻被及行、無比領御勤御短息、殊更渴淺殿御家來
之旁御忠義之由、留守之者共申候、則至作州陣茂申遣候、
様跡可然候て珍重存候、隨而宇喜多与太郎事、從上口一両
日以前ニ罷下、備前表為加勢、羽^(筑紫守)筑其外人致罷下之由候、
則時陣江も遂注進候、諸城御普請等肝要存候、弥立聞候て
可得御意候、恐々謹言、

（天正八年）
正月三日

桂右衛門大夫
吉吉

栗原殿參 御陣所

（天正8年）3月9日 桂景信書状

（天正8年）4月25
宇喜多直家書状

宇喜多基家、毛利勢に討たる。

三國〇 萩藩閥閱錄 卷六十八 湯川平 左衛門

其元調半候哉、差急候、万堅固之調、專一候、仍喜
(基家)田与太郎討捕候、勝利申も疎候、吉左右追々可申候、謹言、
(天正八年)二月廿七日

湯平

輝元御判

〈山口県文書館所蔵〉

其以後者不申通候
処、預御飛脚目出候、
(基家)誠小串不虛付而、
渡口天城之城
取付、則兒島
敵取付之由、懸從
敵方内通候条、去
十八日取上候処、忠家
自身擺出、雖切
懸候、於兩口及戰、
敵追散、頸五ツ
討捕之、則時大崎
村令放火、取居候而
当城皆請申付候処、
猶以其表不可有御
細事専一候、恐々謹言、

二月廿四日 治太 元清(花押)

岡宗左衛門財殿 御返申給へ

尚々、撫川村新
隔子之事、日幡久原方へ
能々可被仰候、與々

以前者

召連候者迄

被付御心候事、

奉存候、

如御意先日者致

參上、御心靜申承、

珍重存候、仍御丸之

普請配之儀被成御尋候、

桂右迄領調進之候、

未被仰渡候哉、

新堀子九間分を引林ル

一堀覆十間

一新堀子廿五間々中

一新隔子十三間々中

一隔子繩替十二間

同鄉

東庄

卯月三日

生石・鶴・新庄、庭妹・

足守村へ可被仰候、恐々謹言、

清長左

井孫兵

まいる御返報

三國〇 萩藩閥閱錄 卷百三十六

元清(花押)

〈山口県文書館所蔵〉

(天正10年) 3月3日
小早川隆景書状

(天正10年) 2月27日
毛利輝元書状

右分書立、桂右へ進之候、

是者空覺ニ面候條、桂殿

書立進之候、可被成御質候、

又大矢倉之材木引手

之事、蒙仰候、昨日者

高松御普請之取々村ニ面

百人申付候、重而者

撫川・東庄、妹尾・箕輪・

足守村へ可被仰候、恐々謹言、

清長左

井孫兵

まいる御返報

(年未詳) 4月4日
清水宗治書状

二三三 萩藩閥閱錄 卷百廿五 宍戸藍
兵衛

猶々、元清・春良可被致加判候得共、後卷之為山見、被
罷出候之条、無其儀候、與々鉄炮衆五人三人なり共、御
上せ肝要候。

(天正 10 年) 3 月 15 日
小早川隆景書状

羽柴秀吉、備前國岡山へ着陣す。

三一〇 萩藩閥閱錄 卷五十 飯田与一
左衛門

從是可申入之處、御飛脚到来祝着候、仍其境無相易儀由、
尤可然候、上勢至岡山罷下之由候て、此表同前之到来候、
實說為可承、居諸勢爰元相扣候、依敵行旁申談可馳向候、
將又東國之儀、織田城介美濃・尾張・伊勢其外五六ヶ國相
催、六万途至信濃國打越候處、武田方及合戰、為始城介無
殘討果候、就夫信長(義忠)至東境目、被打出候由風聞候、依此
儀岡山此節可相分存、播州衆罷下候と不審千万候、何茂一

と存候、右之分候之条、元春・貞俊・元俊・元保・黎縣表
迄繼夜於日着陣候之様、追々被仰下御催促肝要存候、一所
不慮候者、存外ニ可成行候、只今之張合肝心候之条、追々
御人數被相統候ハ、諸城之衆共打丸、是非一安否可仕候、
御短息此時候、恐惶謹言、

左衛門佐
隆景御判

(天正十年)
中月
卯月十三日
(定風元祐)

栗
藏御中之

（山口県文書館所蔵）

(天正十年)
三月十五日

小
左衛
隆景御判

伊
与三
御返報

(天正 10 年) 4 月 13 日 小早川隆景書状

二三三 萩藩閥閱錄 卷百廿五 実戸兵衛

諸々、元清・春良可被致加判候得共、後卷之為山見、被
罷出候之条、無其儀候、與々鉄炮衆五人三人なり共、御
上せ肝要候。

(天正10年)3月15日
小早川隆景書状

羽柴秀吉、備前國岡山へ着陣す。

三一〇 萩藩閥閱錄 卷五十 飯田与一
左衛門

從是可申入之處、御飛脚到来祝着候、仍其境無相易儀由、
尤可然候、上勢至岡山罷下之由候て、此表同前之到来候、
御野宮
夷說為可承、居諸勢爰元相扣候、依敵行旁中談可馳向候、
將又東國之儀、織田城介美濃・尾張・伊勢其外五六ヶ國相
急
催、六万途至信濃國打越候處、武田方及合戰、為始城介無
殘討果候、就夫信長急茂至東境目、被打出候由風聞候、依此
儀岡山此節可相分存、播州衆罷下候と不審千万候、何茂一
兩日中以使者、彼是可申談候条、不能詳候、恐々謹言、

と存候、右之分候之条、元春・貞俊・元俊・元保・猪飼表
迄繼夜於日着陣候之様、追々被仰下御催促肝要存候、一所
不慮候者、存外ニ可成行候、只今之張合肝心候之条、追々
御人數被相統候ハ、諸城之衆共打丸、是非一安否可仕候、
御短息此時候、恐惶謹言、

左衛門佐
隆景御判

天正十年
中旬
卯月十三日

栗
藏御申之

△山口県文書館所蔵△

(天正十年)
三月十五日

小
左衛
隆景御判

伊
与三
御返報

(天正10年)4月13日 小早川隆景書状

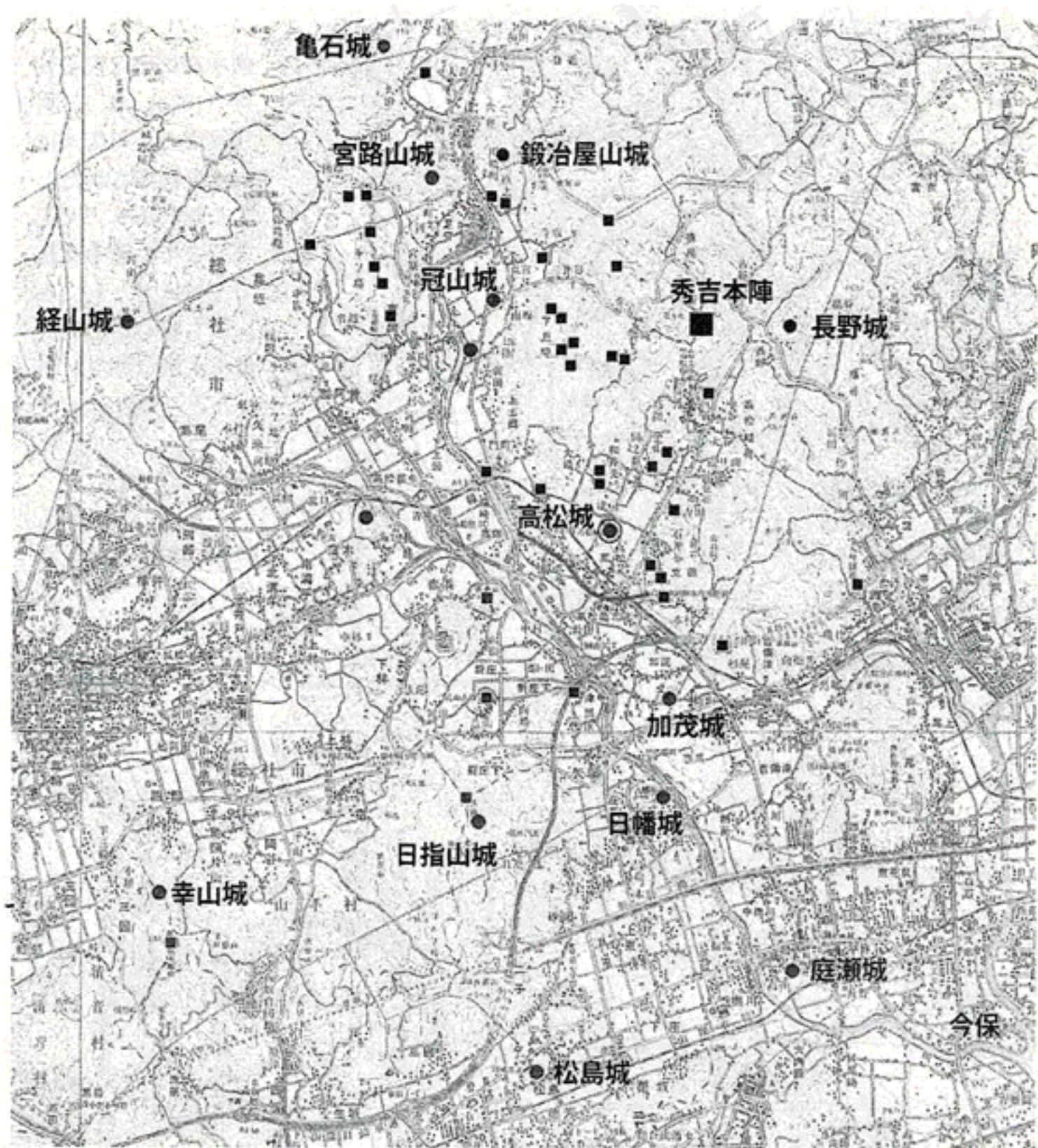


図 11 備中高松城水攻め関連主要城郭・陣地配置